

細川幸夫先生

— 教授会公用語とスペイン的激情について —

岸 本 茂 和

(外国語部長)

ある時期どういうわけかテレビのスペイン語講座を何度かつづけて観る機会があった。しばらく中断をおいてからふっとまた観てみると、こんどは講師が交代している。講師が替わっても、しかし、どこもなにもかわっていないような奇妙な感覚がどこかにわだかまっている。どこかしらん。それは年齢や面ざしがちがっても、あたらしい講師が前任者とおなじ、はんなりとしてやわらかい、鼻音の勝った上方なまりでしゃべることから由来する錯覚が原因らしい。用意された原稿はおそらく共通語 — 標準日本語で書かれているはずなのに、その見馴れぬ講師のことばも亦あきらかに大阪かその近辺 — 京阪神地方でうまれ育ったものがしゃべる近畿上方語なのである。

そのとき私はすこしおおげさなようだが、スペイン語の先生は関西出身者ばかりなのだろうか、そうだ、そうにちがいない、と独断的断定を下してしまい、またその無謀な臆断がそれほどまとはずれでないことを発見した喜びをよろこんだのである。なにしろ自分にもっとも身近なスペイン語の先生のおひとりである細川幸夫先生もまた大阪のご出身であり、それが何よりの証拠になるではないかとひそかに自慢げに鼻をうごめかしたものだ。つねに非論理的論理を駆ってやまない私の雑駁な脳細胞は、先生が卓越したスペイン語学者であり、すぐれたスペイン語教育者である、という結論をみちびきだすのに時間はかからなかった。そしてじっさいにも、先生が卓抜したスペイン語学者・教育者でいらっしゃることは畑ちがいの私にもすでに承知していることだったのである。

ところで、真偽のほどはさだかではないが、阪大の〈教授会公用語〉は大

阪弁で、京大のそれは東京弁だという話を、いつだったかどこでだったか読んだか聞いたかしたことがある。これは大阪と大阪弁とそれを話す大阪人をなみするために巧妙かつ狡猾に捏造された陰謀的言辞で、その制作者はおそらく東京人ではないかと私などは睨んでいるけれど、それはともかく、わが駒澤大学外国語部の教授会公用語は、大学が位置する東京という地理的・地政学的環境からしてどうやら共通標準語らしくおもわれるが、そのなかでひとり細川先生は、言語的故郷喪失者が恥じなければならぬほど堂々と、うぶすな神のしろしめたもう土地ことば——近畿上方語をもちいてきていらした。

むかし大阪に「心齋橋大学」なる土地のものにしか理解しがたい不思議な新造語があって、それは、「南街北巷」——ミナミの心齋橋にかぎらずキタの梅田あたりを、おんな友達（美人でなくてもよろしい）とそぞろあるく、瀟洒でお洒落で都会的な関西学院の学生を、女性には御縁つたない浅黄裏の大阪や京都の武骨な国立大学の学生どもがやっかみ半分に揶揄して指差したことばだった。関西学院のご出身の先生がいまなおシティー・ボーイの雰囲気を持たせられていらっしゃるのは、神戸にちかいあの丘の上のすてきな学校で青春時代をお過ごしになられたからにちがいない。（ついでながら言えばこのばあい、「関西」は〔kansai〕ではなく〔kwansei〕で、「関西学院」はキリスト教系伝導学校が母体であるため、抹香くさい坊主訓みの呉音の〔sai〕を嫌忌して漢音の〔sei〕を採ったそうである。）

よく言われることだけれど、外国の言語・文学研究者の思考と行動のパターンは、対象とする言語や文学を産んだ国人のそれに似るようにおもわれるのは、どうやらほんとうらしい。「イギリス的ということ」「フランス的ということ」「ドイツ的ということ」「中国的ということ」は、それぞれ、現実と夢想の葛藤に困惑しながらもアングロサクソンの中庸をたつとぶ態度、明晰さと論理一貫性が顕著でありながらゴーロワ的・ガルガンチュワ的資質との内部格闘、硬質な哲学的思弁の愛着とゲルマン音楽への偏愛、そしてまた、日本人でありながら「お国の漱石の漢詩にはほとんど和臭がありません

ん。」などと言ってはばかりない抜ききたい中華思想の体現と傲岸、などを意味するだろう。

では「スペイン的ということ」とはなにか。エル・グレコのあの憂いをふくんだ悲しげで宗教的な異様に細長い顔か。ドン・キホーテの崇高な狂気か。アンダルシーアのモーロ的混淆か。それともオリブと葡萄の酒の地中海的清澄さか。アントニオ・マチャードの静謐か。

…ひと括りに言えばこういうことになるのではないかと思う。

先生と親しく「一樽の酒もてともに細かに文を論じ」る機会はついになかったけれど、教授会などで時折かいま見せる《スペイン的激情》としか形容しがたい、鬱懐と発語の適宜を得られぬもどかしさの葛藤から生じると察しられる、内なる火山が爆発するかのような感情の激発。私はそこに「スペイン的なること」の顕れをかいま見、それは必然的に詩人的稟質をともなうはずであると直感した。スペイン語圏世界の歌曲160あまりを渉博すること多年、はたして先生のその詩人的稟質と卓越したフィロロークとしての資質は、みごとな対訳と詳細な注釈を付した『スペイン語圏世界歌の旅〔1〕〔2〕』『永遠のタンゴ』（大学書林刊）として、先生としても自負するところすくなからざるご高作として結晶したことは、当然のことであったようにおもわれる。

先生は神戸の海に囲まれた港湾島に別宅（ほんとうは本宅かもしれない）をお持ちだと聞いている。いつだったか「うちの奥さん、神戸が——関西が、きらいやねん」「駒澤やめたら神戸へ帰ろ思うてるんやけど…」「どないしよう…」と、困惑と諦念のいりまじった声で、すこし寂しげにおっしゃるのをお聞きしたことがあるが、言語的故郷喪失者の哀しみをかなしむものとして、最初にして最後に、先生に、在所のことばで告白しなければならない。

「細川せんせえ、うちの細君も、“大阪きらい”って、言いますねん…」
「どないしよう…」

毎日が日曜日の毎日をご息災におすごしくください。ご健康のためには煙草

はすこし控え目にして。

細川先生のこと

佐藤 玖美子

(スペイン語)

「いつまでもあると思うな親と金」 私の人生で今程このことわざを噛みしめている時はない。勿論、親でも金でもなく、細川先生のことである。例えば、私が駒沢大学に来て以来この27年間、正直言って総てにおいて細川先生に頼り切りの27年間であったように思う。妹と二人姉妹の私にとって、細川先生は兄のようでもあり、又（“僕とサッさんはあんまり年は違わないのよ”とみんなに言いたがる先生には叱られるかもしれないが）親のようにさえ感じる時もあった。そして事実、この駒沢大学で現在教鞭を取っている私があるのは、細川先生との出会いのお陰にほかならないのである。

私は昔から運命というものを信じる人間であるが、今思えば、私が慶応大学の英文科に居ながら（私が東京外国語大学大学院にスペイン語専攻で入ったのは非常勤講師として務めていた時である）スペイン語を勉強しようと決心した他愛ないきっかけから細川先生に出会う迄も、不思議な運命の糸に私が素直に従って来たお陰だと思う。自分の話になって恐縮だが、大学時代ぶらりと遊びに行った上智大学のダンス・パーティで当時のアルゼンチン大使と偶然出会い、大使秘書として働かないかと誘われて、在日アルゼンチン大使館に勤めることになったのが、私がスペイン語の人生を歩む第一歩であった。そのアルゼンチン大使館の或るレセプションで、今は亡き恩師の田中辰之助先生に再会し、先生は慶応外語の講師に私を推薦して下さった。そのお

陰で、私は当時その外国語学校でも教鞭を取られていた細川先生と出会うことが出来たのである。もう30年近くも前のことであるが、細川先生は不思議と当時とほとんど変わっておられない。確かにあの頃は体も今よりも弱く、少し年より老けて見られがちだったから、すっかり元気になられてむしろ若く見られるようになった今、年の経過が感じられないのももっともである。また、本当にお洒落でダンディーなスタイルも変わらないし、曲がったことが大嫌いな熱血漢ぶりも変わらない。あえて変わったことと言えば、あの頃は、熱いミルクの入った魔法瓶を抱きかかえ、時々それをちょびちょび飲まれるといった弱々しい風貌が女性の母性愛をくすぐり、いつも女子学生に取り巻かれてかいがいしく世話されていたこと位であろう。又、細川先生の頑固な迄に通されている関西弁も驚嘆に値する。関西弁といってもいろいろあるそうだが、大きな商家のぼんぼんとして育てられた先生の正統派の関西弁は、先生の半世紀にわたる長い東京生活でもわれわれの東京弁に一切影響されず、乱れることがない。

細川先生は、あまり知られていないかもしれないが、スペイン文化、そしてアルゼンチン・タンゴの大変な研究家である上に、日本の歴史、文化に関しては専門家はだしなのである。細川先生の浄瑠璃とタンゴとの比較研究などは、世界広しと言えども、誰も手掛けたことのない分野であり、細川先生ならではの研究であろう。こうした日本文化、そして日本の歴史の話になると、細川先生の弁舌はますますさわやかになる。ただ、残念ながらこうしたテーマについてあまり素養のないわれわれが、ただうなずいている丈なので、だんだん熱が冷めてきて、しまいにはいつの間にか話がそれてしまう、ということもしばしばであるが。

しかし、こうした細川先生の熱弁ももう聞かれなくなると思うと、心の底から寂しさがこみあげて来る。今初めて、普段忙しさにまぎれて気がつかなかった人生の流れ、時の流れが現実としてひしひしと胸を打つ。

細川先生は定年後、東京を引き払われて、ご一家で先生の愛してやまない神戸に住まわれるそうである。神戸の港を一望のもとに見渡せるテラスのあ

るご自慢のマンションで、これからもスペイン語の参考書作りや、翻訳などで、忙しい毎日を送られることだろう。研究室では、お医者から厳禁されているたばこを、奥様の目が無いことを良いことに、すばすばやられていたが、これからは厳しい監視の目の下で、それがかなわなくなることは喜ばしいことである。本当に、細川先生には、いつ迄も今と変わらずに、長生きして頂きたい。そして、先生から“サッさん？ わしや、わしや、細川や”という電話が神戸から掛かることをいつも心待ちにしている私である。

細川先生の思い出

栗原万修
(ドイツ語)

細川先生に最初にお目にかかったのは、もう30年近く前のことになる。私が仙台の大学から転任してきた昭和41年のことである。私はそのとき31歳だったが、当時、全学でもっとも若い専任教員のひとりだった。そして新任教員の歓迎会を兼ね、全学の専任教員の懇親会（互助会）が玉川の料亭で開かれ、その席上でお会いした訳である。ただし、たくさんの人たちが居られたので、その日、細川先生と直接お話しすることはなく、遠くからお見かけただけだった。けれどもその日の先生のことは、いまもはっきりとおぼえている。いささかのハプニングであったのだろうが、宴席半ば、突然先生が立ち上がられ、ご自分の授業時間のことで教務部長に大声で文句をいわれたのである。とくに酒に酔っているふうはなかったが、かなりきつい口調で縷々話をされた。当時の教務部長は、後に副学長をされた若月先生だったが、今とちがい大変な権力をもっていた教務部長も、突然のことで目を白黒

させているという感じだった。駒大には勇ましい先生がいるな、と思ったが、それが細川先生との最初の出会いだった。

以後、講師室で時折細川先生とも話す機会があった。当時は研究室などなかったのも、専任教員もみな講師控室にたむろしていたからである。南米のことや近松の芝居の話などを聞かせてもらったこともあった。しかし、先生との接触が多くなったのは、外国語部が文学部から独立してからである。一度英語の山県先生と三人で渋谷の飲み屋にいったとき、細川先生が話された南米での体験談には本当に腹を抱えて笑いが止まらなくなった。先生はどちらかというと話し好きなひとである。興に乗って話しはじめると止まらなくなるところがあったが、私は先生と話すのは楽しみであった。

ただし教授会や委員会で先生が発言されることは、大変するどい指摘もあったが、正直に申し上げて、いつも少しピントがずれていたようで議長は先生の発言の扱いに苦慮されることが多かったように思う。先生は個人的に話をされるのは好きだが、会議というのは苦手のようなのである。何となく、いつもいらいらされていた。それで時折、席上毒舌を吐くこともあったが、細川先生の場合はそれで嫌われるということにはなかった。これは先生の日頃の悪意のなさ、人柄のよさのお陰で、言ってみれば先生の〈人徳〉ということであろう。

私はここ数年スペイン語をやっており、先生にいろいろ教えてもらうこともあったが、また先生から自著を何冊か戴いた。そのなかの、スペイン語からの先生の訳詩のうまさには常々感心させられ、今も時折本を持ち出しては読んでいる。会議等で〈勇ましかった〉先生と、研究室で西鶴や浄瑠璃のことなどを熱をこめて話された文学センス抜群の先生への思い出は、私にとって終生忘れることのないものになるであろう。

細川先生の古稀を祝う

中 村 璋 八

(中国語)

私より一歳年上の細川先生は今年度中にめでたく「古稀」を迎えられ、来年3月には定年退職されることになった。これは喜ばしいことであると共に、また淋しいことでもあるが、私も来年度は同じ運命になるので、私の気持ちを率直に申し上げれば「長い間、誠にご苦労様でした」と言うことになると思う。

細川先生とのお付き合いはもう25年以上になり、その間、2人ともスペイン語と中国語と言う外国語部の中では小数派に属する語学の主任をしていたこともあったので、協力して頂いたことも、ご迷惑をお掛けしたことも数限りなくあり、短い文章では到底語り限せない。

先生は身体が必ずしも強健とは言えず、3、4年前、新玉川線の駒沢大学駅の処などでおいすると、階段の手摺りに掴まりながらやっこのことで昇っておられる御様子を拝見したこともあり、先生のご健康を心配していた。しかし、最近は元気を取り戻され、以前の状態になられたので安心している。現在の日本は長寿社会と言われ、中国、唐代の代表的詩人の杜甫が曲江詩の中で「人生七十、古来稀れなり」と詠じたところから70才になると「古稀」と言って祝っていたが、最近では普通のこととされている。しかし、一つ年下の私の友人でも多くの人々が幽明界を異にしている。やはり古稀まで現役で無事に勤めを果たすことは難かしいことであり、祝うに値いする慶事であることは確かであろう。

先生とお話をしていて最も印象に残っていることは、生れ故郷の神戸をこよなく愛しておられることと、極めて純粋な性格の人柄であると言うことで

ある。神戸の街は、学会などで出張した折に幾度か訪れ、市内を散策することもあったが、確かに美しい（昔は）海岸と緑の山に囲まれた住み易い都市であるが、先生とお話をしているといつも神戸の自慢話しになった。今では神戸にもお宅をお持ちになり、時々、休暇中は行っておられるご様子であるが、これからはご自慢の神戸で悠然として時を過される機会も多くなると思う。羨しい限りである。ご性格の純粹さは、自分の考えや現在の状態を殆んど他の人のことは余り気にしないで、思った通り発言されることである。私など周囲のことを気にして仲々言えないことも、思った通り率直に言われる。それらの発言の中には、他の人々の気に触ることもあるが、先生のお言葉の中には悪意など微塵もないことは誰でも知っているので気を悪くする人はいなかった。これは先生の人徳の然らしめるところであろう。しかし、余り人の意見に耳を傾けないような頑固さも時には感ぜられた。だが、若い女子学生には人気があり、いつも研究室には誰かの姿が見られ、楽しい時を過しておられるご様子であった。これは先生の率直な飾り気のないお話しに興味を持っていたからだと思う。

最後に、今迄のご好意に感謝をすると共に、今後の先生のご健康と悠々自適な生活が叶えられることをお祈りして筆を措く。

(1994. 9 . 9)

細川幸夫先生の思い出

柴野博子

(ドイツ語)

今年の3月のある夕べ、同僚の先生方とスペイン料理を楽しむ機会があり、その席で、駒沢の名物教授のことが話題になった。そして外国語部の名物教授と言えば、何と言っても細川先生であろうということになった。私が細川先生の名物教授ぶりを垣間見るのは、主として教授会の時である。先生は、たいてい、会議が始まってしばらくしてから、ふらりと入ってこられる。そしてだまって座っておられるが、やがて御関心のある話題になると、急に元気になられて、きわめて活発に御意見を述べられる。その齒に衣着せぬ御発言は、関西弁と相まって、しばしば独特のおかしみを生み出し、ともすれば退屈になりがちな教授会にあって、ある種の清涼剤のような役割を果たされたように思う。時には激しい感情をおつけられたり、あるいは唐突だと思われるようなことをおっしゃっても、あまり憎まれたり非難されたりしないのも、やはり人徳の賜物であろう。そしてあの激しい御発言も、こと語学教育に関しては、専門家としての確固たる信念と見識に裏打ちされているように思われる。ただそれが、実際にはなかなか実現しにくいものだったのであなかろうか。

細川先生についてもう一つ忘れがたいのは、2・3年前頃まで、研究室でよく女子学生に囲まれて談笑しておられたお姿である。先生は、スマートに背広を着こなして、いかにも楽しそうにしておられた。ここでは、会議の時とは対照的に、先生のお優しい側面が女子学生を魅了したのであろう。

細川先生は、聡明な佐藤玖美子先生とコンビを組んで、特色のあるスペイン語教室を築いてこられました。このような個性豊かな先生がお辞めになる

ことは淋しい限りです。これからもどうかお健やかに過ごして下さいませよう
お祈り申し上げます。

細川幸夫先生の定年退職に寄せて

田 中 保
(英 語)

細川先生を存じ上げるようになったのは、私が駒沢大学に専任講師として勤めさせていただくことになった昭和48年4月です。あれから、かれこれ20年以上になりました。しかし、先生に親しくお話しをさせていただくようになったのはほんの数年前たまたま法政大学の62年館講師室で一緒するようになってからです。その頃、先生は学生や一般者用のスペイン語会話本の原稿づくりに余念がありませんでした。それまでに先生はスペイン語テキストを数冊出版しておられましたが、どれも独創性に富んだユニークなテキストでしたので、今度の本はどのようなものであろうかと私は内心興味を抱いていました。いつもバッグの中に原稿を入れていて時間をみつけては推敲に推敲を重ね赤字をいれていた先生のお姿を拝見していましたので、それが出版され1冊先生から頂戴いたしましたときは自分のことのようにうれしく思いました。『英語から学ぶ スペイン語会話』（創拓社）という本ですが、テキストの表題通り英語の知識を活用しながらスペイン語をも学べるという一石二鳥のテキストでした。まさにスペイン語会話学習者にとって待望のテキストではなかったでしょうか。そのテキストの編集をみまして、常日頃先生が学生と授業をいかに真剣に取り組んでこれらてきたか、先生の語学教育に対する真面目な姿勢を垣間見させていただいたような気がいたします。

「言語は人間の知性と感性の象徴であり、幾世紀にもわたる先人の知識の宝庫です。スペイン語の学習を通してスペイン語文化圏の社会・文化の理解を深めることは日本の社会・文化をも相対的に再認識することになり、自己の内に複数の文化を共有する楽しみがあります。」と、テキストのまえがきで先生は述べていらっしゃいますが、これは先生が駒沢大学で30年間にわたって教壇に立ってきたスペイン語教育への一貫した道標でありましょう。

そうした教育理念をお持ちの先生ですから当然とってしまえばそれまでですが、先生はスペイン語がよくおできになるばかりでなく、スペイン文学・スペイン近代派の詩やスペイン文化にも造詣が深く、折りにふれ先生がしてくださったスペインのいろいろなお話を伺ってはただ敬服するばかりでした。

先生 永い間お勤めご苦労様でした。これからもお元気で、スペインの文学や文化に情熱を燃やし続けて下さい。

思い出すままに

石原孝哉
(英語)

細川幸夫先生が定年で大学を去られることになった。肉体的にも精神的にも、まだ十分やれるのであるが、規程には体力年令とか、精神年令はない。特に後者において、先生は万年青年であると思う。

先生は本学のほか、何校かで教鞭をとられたが、5年ほど前、慶応の日吉キャンパスで隣同士の教室で教えたことがあった。

細川先生のクラスからはときどき笑い声がおこり、そのたびに学生の神経

がそちらに行くので、隣の教室の教師としては、多少やりにくいところがあった半面、あれだけ学生を喜ばせている先生をうらやましく思った。

私も授業中にジョークを言ったり、脱線したりして、学生からは「先生の授業は真面目なときより脱線したときのほうが面白い」などと変なお墨付をもらっているが、細川先生と比較すれば足もとにも及ばない。あるとき授業が多少早く終わったときに、先生のクラスをのぞいてみると、例によって学生が大喜びしている。しかし、先生の方は大真面目で一所懸命に話しておられる。そして先生がムキになればなるほど学生はウケていた。先生はいつも本音で話をされ、それが建前と虚構でできた常識と鋭く対立することがある。それが学生にウケるのである。先生のこの純粹さゆえに、先生の回りにはいつも学生が群がっていた。

ある時いつもよりひとときわ高い歓声が隣のクラスであがり、終わると廊下には両手に持ちきれないほどの花束をもった細川先生の姿があった。慶応は兼任でも定年が65歳で、この日が先生の最後の授業であった。学生も泣き、先生も目をしばたかせていた。

学生と喜怒哀楽を共にできること、これが細川先生の万年青年たる秘密のように思える。どうかいつまでもお健やかでいて下さい。

細川幸夫先生のこと

岡崎 寿一郎
(英語)

スペイン語科の細川幸夫先生が、本年で定年退職されることになりました。日頃、いつでも御話しできるとおもっていて、うかうかと時を過ごして

いたら、あっという間に20年の歳月が過ぎていました。なにか取返しのつかないことをしてしまったような気持ちがします。いまは、教授会での先生の数々の名言（たまには迷言も）が懐かしく思い出されます。いつでしたか、教授会の議論が迫熱して、途中で、先生が「革命じゃ、革命じゃ」と叫ばれたとき、私はおかしいよりも、さすがに情熱的なラテン民族の言語の専門家はすごいなと感心いたしました。

ところで、外国語部など、わずか40数名の人間しかいない組織でも、それなりに、人間関係の軋轢とか、教育行政の問題などといったこともあるのですが、先生はそういったことには頓着せず、御自分の意志のままに生きてこられたとおもいます。それが自然で、そのままの人柄であった稀有の人でした。しかし、教授会で発言される時、先生の発言の根底には、いつも常識があったとおもいます。しかし、常識という言葉、先生が口にされたことは一度もなく、また、自分を常識家とはおもっていなかったとおもいます。

話しはかわるのですが、私は、学生の頃、第二外国語のフランス語の発音で苦労しました。それで、いつでしたか、「フランス語の発音はなんであんなんですか」と、先生にお聞きしたら、たった一言「寒いからじゃ」と、おっしゃいました。つまり、フランス人は寒いので口を開かずに話すからあんなったんだというのです。それから、「そこへいくとイタリア語は、ええで、簡単なもんじゃ」と、いわれました。私は、もっと面倒な高説が聞けるものと期待していたので、拍子抜けしてしまいました。でも、何んとなくホッとした気持ちがしたことをおぼえています。近年、肩を落とされ、悄然と歩く先生の後姿には、さすがに老いが滲まれています。しかし、細身の蕭洒な容姿には、ますます、飄々とした風格がそなわってきたようにおもわれます。まだ書くことはあるのですが、寂しくなるばかりなのでこれで終わります。長い間の御厚情に深く感謝いたします。どうぞいつまでも御元気でいてください。

細川先生へ

杉山秀子

(ロシア語)

細川先生、おやめになられる日がとうとうきてしまったのですね。先生がこの4月から大学に姿をお見せにならないような気がどうしてもしません。どこか会議室の片隅から先生の意気軒昂たる声が聞こえるような気がしてならないのです。

思い起こせば、この16年間いろいろとお世話になりました。先生の御発言はいつも齒に衣を着せなかったので、時としては鋭い刃となってぐさりと突き刺さったり、また時としては笑いを誘うものであったりしました。あるときの主任会議では、ロシア語のみ無給であった旧主任制度にたいしてロシア語が異議を唱えたとき、「ロシア語だけ無給の主任をおいておくくらいなら、わしも主任なんぞやめていい。僅かばかりの主任手当なんぞいらん。」と激しい口調でおっしゃって、ロシア語の立場を弁護してくださいました。また私が短期在外研究で教授会を欠席したときもロシア語の立場を代弁してくださいましたとお聞きしています。後でこのことを伺って、駒沢では最小の語学の意見など普通なら打算が先行して黙殺されるところをよく擁護してくださいましたかと心より感謝いたしました。ことかように純粹かつ直情的で、感性あふれる先生のお人柄は定年最後まで少しも変わることはありませんでした。数年前ラテンアメリカを廻られた後、先生はお便りをくださいました。そこには旅の喜びと同時に限りある人生にたいするそこはかとなないペースが漂っていて読むものをしみじみとさせるものがありました。

外国語部における細川先生は単にスペイン語を教える人ではありませんで

した。広い教養に裏づけられた独特の言語哲学観をもっていられました。先生のスペイン語文化圏に対する深い造詣と言語と文化論は浅薄な専門偏重主義や語学一辺倒の誤りを大いに正す説得力あるものでありました。全学的な改革のこの時期に大切な人を失ってしまうのは外国語部にとっても大きな損失といわざるを得ません。でき得ることならもっともっと活躍していただけたらと思うととても残念でなりません。

先生はあるとき「杉山さん、横浜の風はほこりっぽくていかんよ。なんか荒々しいね。」と言われたことを覚えていられますか？「どうしてですか？」と伺うと、「神戸の風は優しいのや。」とおっしゃいました。生まれてうん十年横浜育ちの生粋の浜っ子の私には比べるよすがもなかったのですが、六甲おろしのキメの細かいしゃれた風は先生にとってはかけがえもないものなのでしょう。神戸には別邸をもっていられるとか、どうぞお気に入りの風土の中で悠々自適の御生活をお送りくださいますようにお祈りいたしております。

森と樹木 (知識の [内・外])
あるいは
ドン・キホーテの旅

小 玉 齊 夫
(フランス語)

私は、私と私の環境である。

ホセ・オルテガ・イ・ガセト

既に遥かなる遠い八月の日々、うだるような暑さのマドリッドで旅の記念に読めもしないスペイン語のしかも革装の *Don Quijote* を買い求め、そこか

ら大西洋に面したカディスまで、乗せてもらった車はそれこそロシナンテ並みで、涼を求めて窓をこじ開けると熱風が音をたてて吹き込んでくる、そんなヒッチハイクを通して、私は初めて〈スペイン〉を発見したようである。

いや、初めてということだけで言えば、既にその二年前、フランス側の小村ユルから小川を渡り林を通り森を抜け、一時間半ほど歩いてスペイン側の国境の町ピュイセルダに入り込んだことはある。あたりを見物し、ラ・ミランダという大衆食堂で魚やイカのフライの昼食をとり、買い物をしてフランスに戻って来たただけだが、パスポートも持たずの往来は、考えてみれば、白昼堂々の密出入国。加えてヘレスの葡萄酒やデュカドスとかセルタス（箱の絵は「遍歴の騎士」ドン・キホーテの勇姿であろうか）という紙巻き煙草などの密輸入の嫌疑もかけられない訳ではない。だが、国境の人々にとって自由な行き来は当り前のこと。それに、カタルーニャの者同士が厳しい取り締まりをするはずがない、というのがユル村での希望的観測である。事実、別の越境の時、二人のスペイン国境警備隊員に出会ったが、肩にかついだ銃で威嚇されることもなく殊更のお咎めもなく、青空の下、お互いに微笑みを交して別れたただけであった（もっとも、私の顔つきやスタイルはそれほどカタルーニャ風ではなかった、はずであるが...）。

ロマネスク様式のサン・マルタン教会（十八世紀に修復されている）を中心に三十戸ほどの家々から成るユル村には、これまで五回ほど、夏の休暇の一部を利用して訪れている。最初の時は地中海側のペルピニオンから、ピレネー山脈の合間を縫うように走る小さな高山鉄道を利用したのだが、*血*と太陽号と名付けられたそのディーゼル列車の車体は、ホアン・ミロを想わせる鮮やかなオレンジがかった赤と黄色のカタルーニャの色で塗られていた。フランスとスペイン両国にまたがるこのカタルーニャ地方には特有の言語・文化が存在しており、国籍でいえばフランス人であるユルの人々も、「我々はフランス人でもスペイン人でもない、カタルーニャ人だ」と誇らしげに言いたてていた。ピレネーの向こう側、同じように固有の言語・文化を有するバスク地方出身のミゲル・デ・ウナムーノは、さすがに〈知識人〉だけに、自身

の果たすべき役割は「フランスとスペインとを繋ぐ^{ハイフン}結合符」になること、と自己規定しているが、カタルーニャ讚美に終始する素朴な民族主義の方も、しかしこの山間で聞いていると、必ずしも独善的とか偏狭とかではない、それはそれで地に根を張った充溢した思想のように響いてくるのであった。

〔旅・①〕 そのカタルーニャを、しかし私などは、1936年の「スペイン内乱」に関わる些少な知識によってでしか感得し得ない（オーウエルとか...）。バルセローナのMuseo de Arte de Catalunaで得た情報・知識なども、実地に見聞するカタルーニャの人々の在り様と必ずしもじっくりと繋がってこない。そんなことは、ある意味では当然なのだが、それでも、旅の成果を求める意欲に駆られて、恣意的に新たな知識を作り上げ自身を納得させよう、と試みる自分がいる。だが、これは私だけのことかもしれないが、自己の内部でいちおうの折り合いがついた時から、外部に在るもの、知識として構想され公表される「歴史」には登場してこない個々の人々の生活などが、すっかり捨象され忘れられてしまうのだ。作り上げられた知識に合致する旅が重要視され、これこれの場所に行ったという旅の軌跡だけが強調されてくる。おおまかに森の存在を認めただけで、それがどのような樹木で構成されているかは、少しも、記憶にとどめられない、ということになる。

〔旅・②〕 特定の知識を求めての移動、も含まれるのかもしれないが、しかし、旅というこの〔時間・空間〕踏破の試みには、もっと別の効能も有るのではないのか。上記のように忘れられがちな人々の生活を再認識させてくれる、少なくともそのための契機を与えてくれる、というような。あるいは、森の中を彷徨（そう、語彙はまさしく彷徨でなければならない、広義にはペーター・カーメンティントの青春のような、直接的には森の中に愛を求めるゴルトムントのような...）するうちに、木々のありのままの姿が判然と**細密画**のように眼前に展開されてくる、さらには、樹木と共生する昆虫や小動物、微生物までが**夢幻**のように拡大されてきて探索をつづける旅行者の眼を撃つ、というような...（と書いていて、急に、フランス語がそれほど流麗ではない、ある友人の両親の姿を眼前に見る思いがした。フランコ政権成立

後にバルセローナからオルレアン近くのロモランタンまで逃れてきたという彼等を、マルローの『希望』の中の人物を目にしたかのように三十五年後の彼方から、招かれた友人宅で、ぼうっと眺めていた記憶がある。彼等が赤い旗を掲げる系統であったか、赤・黒の旗の下に結集する側であったか、それによって私の思い入れも異なっていたのだろうけれど…)

自身とは異なる文化性を擁して生活している人々を前にして私の意識が集中を余儀なくされるのは、自分の知識と他人の生活との間に存在する、容易には埋め難い乖離である。[関東／関西]の文化的差異でさえ、実際には十分な[表現・了解]行為の対象に成り難いことから、カタルーニャはもちろんのこと、スペインに対しても、埋め難い乖離の感覚は、当然、実感されてこなければならない。にもかかわらず、最初の密入国の際に私が見聞きしたのは、国境の向こうにある、単なる地理的区分としてのスペインにすぎなかった。パスポート不携帯の私には国を越えるという意識もなかったようだから、不遜にも「フランスの延長としてのスペイン」の一部を通りすぎて帰って来ただけ、であったのかもしれない。そんな私が、その翌々年、宗教の垣塙のような灼熱のトレドや酷暑のセヴィリヤ、コルドバ等で観光に数日を費やしたくらいで、僭越にもスペインを発見したなどと言えるはずがない。実態は、乖離への無自覚から自覚的状态へ、そして、その自覚の延長上に在るスペインに対して或る[感覚・方向・意義]の確定を試みた、といった程度なのだが、しかし、これにはいささかの説明が必要であろう。

※ ※ ※

子供向けの本であったにもかかわらず(あるいは、まさにそのゆえに)、私は『ドン・キホーテ』を読み通すことが出来ないうでいた。恥をしのんで付け加えれば『セロ弾きのゴーシュ』も同様で、その世界に入り込めない、と言うよりも、そこから拒まれているような不可解で不快な違和感とともに中途

で本を閉じざるを得ない作品でありつづけた。立ち並ぶ風車を「三十かそこらの不埒なる巨人」とみなし、「拙者は彼奴らと一戦交じえて、一人残らず皆殺しにいたし、その勝利品をもってわれらも富裕になろうというのだ。なぜと申して、これは正義の戦いだからで、こういう邪悪の種を大地の面から除き去ることは、神に対する大きな奉仕でもあるからだ」というような「才知あふるる郷土」ドン・キホーテの言動は、正気を失った男の滑稽な姿が過度に強調されているだけのようで、私には理解が届かなかつたし好意を寄せることも出来なかつた（引用は河出書房新社版『ドン・キホーテ』会田 由訳による。この部分は、講談社版、安藤美紀夫訳の『少年少女世界文学館 ドン＝キホーテ』では、「大男どもが三十人ばかり、わしらのゆくてに立ちふさがっておるではないか。わしはきゃつらをひとりのこらず退治して、ドルシネーア姫へのみやげといたそう」とだけ訳されている。なお、以下のすべての強調は、如何なる形であれ、引用者によるものである）。落語の「与太郎もの」が好きになれなかつたのと同様で、単なる認識の錯誤に何故かくも過剰な意義を与え得るのか、というのが当時の私の感想であつた。比べるつもりも勿論ないが、スタンダールは十歳の頃、フェロニエールの別荘の科の木の下で「死ぬほど笑」いながらドン・キホーテを読んでいたという。今さら我が力の貧困を悔やんでもしょうがないのだが、私には『ドン・キホーテ』がもたらした文学的意義などは少しも理解できなかつたのであり、常識的な教養のせいで、セルヴァンテスの奔放な構想力が産み出す荒唐無稽な冒険・旅行譚の面白さも、まったく把握不可能だったのである。

それはそれでやむを得ないことなのだが、それにしても、何とはなしの不満は内部にくすぶりつづける。しかも、ウナムーノやオルテガは、ドン・キホーテの在り様をスペイン文化と同視する解釈を提出しているのだ。となると、私のスペイン理解への可能性は既に幼い頃から閉ざされていたのか否か、その決着をつけなければならないような気にもなってくる。だが、かつて感情的に反発さえした本の面白さを、新たな知識を獲得することで理解できるものだろうか。スペインの在り様と同視される「憂い顔の騎士」の行状を、仮に私が理解し得たとして、それは同時に私のスペイン理解をも保証し

てくれるのだろうか。

※

[知識・①] 生活の中で新たな情報・知識がもたらされる時、我々がそれらを厳密に純粋な認識可能性の観点から対象化することはきわめて稀である。通常は、これまで形成・産出してきた（させられてきた）認識（[表現・了解] 行動の総体と規定しておく）の傾向性を前提とし、それに基づいて簡単な（ほとんど自動的な）吟味を経てから、当の情報・知識を素朴に [受容／拒絶] することになる。

知識は、認識活動によってもたらされた情報素材が、それらを統合する上での諸原則（方向性・系統化）に基づいて整序されたもの、をさす。ただし、統合は、いわば「権利」概念であって「事実」概念ではない。この段階では、情報・知識の [真／偽] は直接的には問われない。情報・知識の受け入れや拒否の第一の基準はこれまでの認識の傾向性と矛盾するか否か、であり、情報・知識それじたいが正しいか否かは、まだ考慮の対象にならないからである。ただし、実際には情報素材の収集時にも既に「統合上の諸原則」が働いているために、内容あるいは意図によっては、この矛盾律によるほとんど自動的な吟味の内部に、情報・知識それじたいの [真／偽] 基準が含まれ、それによって既に選択がなされる場合もある。

[真／偽] は、表現に関わる了解事項と生起しつつある（した）事態との、直接的な対応性の有／無、と考えておく。

[知識・②] 認識の傾向性あるいは統合上の諸原則が修正されるのは、これまでの傾向性等と矛盾する新たな情報・知識が、自身の認める〈正当性あるいは妥当性〉によって [受容／拒絶] を強制してくるときである。

この正当性あるいは妥当性は、自身の内部に認識の安定した状態を成立させるための根拠として存在しているが、傾向性の修正に際しては、たとえ強制的と自覚されるような場合であっても、新たな情報・知識と既存の認識

の傾向性との間で、何らかの統合（複数の、場合によっては対立する複数の正当性の間での調整と、その結果に基づく新たな〔表現・了解〕の体系の整備）が、その都度、なされるのでなければならない。

〔知識・③〕〔不安・不快・不可解〕等の感情は、認識の安定した状態を脅かす要素でもあるが、しかし逆に、感情の〔感覚・方向・意義〕も何らかの新たな知識が付加されることによって、その根拠を喪失し、原体験についての新たな別の了解がもたらされることがある。

この時の、外部からもたらされ内部化されることになる新たな知識は、〔論理・感覚・感情〕の主体が体験を通して形成・産出してきた傾向性に否定的に対立して在るもの、である。この「否定的な対立」は、しかし、それによってこれまでの傾向性がすべて破壊・否定されるのではなく、その時点から新たな傾向性へと統合される、その契機として在るもの、である。

〔知識・行動〕行動の根拠に在るのは、個人がそれまでに形成・産出してきた了解的知識を〔内・外〕へ表現しようとする意欲（情熱・感情）である。

〔講読〕（登場人物の行動等によって具体化される）小説表現の総体は、登場人物等の背後に存する作者の知識の外在化（表現）である。

「作品を読み返すたびに、新たな意義が作品の内に発見される」という事態は、新たな知識を〔受容／拒絶〕する、その時点に於いて、我々の形成・産出する「知識の傾向性が、生のさまざまな段階に於いて、その都度、可変的である」という公理に基づいているからである。

我々の認識の傾向性が可変的であるということは、新たな知識に基づいて「認識あるいは了解の統合作業が不断に生成され得る」ことの実例、とすることが出来る。ただし、この統合は〔論理・感覚・感情〕の各次元で行われるため、原理的に可能であってもそれが即座になされる訳ではない。

統合を現実化する力あるいは能力は〔論理・感覚・感情〕の主体によって異なっている。この異なり方・異なる程度は、認識の傾向性じたいの持つ、変化への抵抗力の強固さに応じて定まってくる。

〔講読・『ドン・キホーテ』〕「五十歳になんなんとしていた」アロンソ・キハーノが「暇さえあれば、たいへんな熱中ぶりでむさぼるごとく」騎士道物語に読み耽る。「夜はまだ明るいうちから白々と明けはなたれるまで、昼は昼でまだ暗いうちからとつぷりと暮れはてるまで、ひたすら読書三昧」で過ごすからには、(ハムレットのような)十八歳の感受性の持ち主でなくとも、眼にする活字の思想あるいは「幻想が彼のうちに満ちあふれ」るのは至極当然のこと。自身の存在のすべてが幻想に覆われた経験(過去)を持たない者には理解を超える行為であるが、五十歳の男であっても、自身が決行した講読の成果(=知識)に基づいて、物語の架空の世界(=過去の騎士道の世界)を現実の(=現在の)世界へと進出させ、ふたつの世界を厳密に過不足なくぴったりと重ね合わせる事が出来るのだ。「ドン・キホーテ=狂気」の発生あるいは「情熱(感情)=ドン・キホーテ」の誕生。

〔架空・過去〕の世界の再生・再現に努める知識(=アロンソ・キハーノ)が、従者を連れて旅に出かける時点から、〔狂気・情熱〕と化した知識(=ドン・キホーテ)が、現実の(講読の)次元に自身を顕現させるに到る。〔狂気・①〕書かれた(=美化された)世界と現実の世界との混淆。(現実よりも活字によって表現された世界を偏重するという意味でまさしく知識人たるドン・キホーテ...)

〔狂気・②〕過去の(=美化された)世界と現在の世界との混淆。

〔情熱(感情)〕個人の内部の乖離の解消を現実化する、そのための情動的根拠、が情熱である。そして、個人の在り様が統合態としてあるという事実性が、この解消行動の実現の前提を構成している。

「情熱(感情)=ドン・キホーテ」は、自身の内部の〔知識・生活〕の乖離の解消へと向かう。もちろん、自身の知識から出発し自身の知識に自身の生活を一致させる方向で。

程度あるいは方向の相違こそあれ、乖離を解消しようとする試みは、必ずしもつねに〔真/偽〕に関与しない。ドン・キホーテの認識の傾向性は、騎士道物語の内部を貫く論理・感情(イデオロギー)に徹底的に支配されてい

る（その徹底さがもたらす力のゆえに、作品『ドン・キホーテ』は二百年の伝統ある騎士道物語を消失させることが出来た、と言われる）。

そして認識の錯誤は、自身の内部の〔知識・生活〕が外部に自動的に進出する時点で形成・産出される。過去に通用した行動の規範、騎士道的〔倫理・行動〕を現代に適用させようとする理想主義者（観念論者とも言われた）ドン・キホーテは、この適用の可能性について疑念すら持たない。彼の言動は、過去の規範に従い過ぎているがゆえに異常な雰囲気呈して嘲笑の対象となる。過去の理想によって現在を見るために現実との乖離に気づかず、自身を極とする自身の過去からの視野に信を置き過ぎているがゆえに、狂気の様相を呈して揶揄の対象にもなる。彼の確信の深まりは他の者との乖離の深まりであり、彼の信念がいわゆる正常者にとっては了解不能であることが再確認される、その度に、騎士（「権力への意志」のドン・キホーテ的発現！）としての使命感に駆られた彼の情熱はいつそう燃え上がりかきたてられることになる。ドン・キホーテの〔表現・了解〕活動の根底に在るのは、ひたすらな情熱・行動への意欲である。オルテガによるなら、「ドン・キホーテは努力の人であった」、あるいはまた、「彼は心情の男であった」。

五十歳の男に無軌道な冒険へと向かう若者の力（言うならば“virtus”としての情熱）を与える、その設定と交錯するのが、もはや存在しない過去の時代の論理・感情（知識としてのイデオロギー）を至高のものとみなし、その再生（それを再び生きること、生活のイデオロギー）に全身全霊を捧げる男の旅程、と言う卓抜な設定である。構想された理想世界の内部での理想の具体的な追及。

〔旅・③〕ドン・キホーテの旅は、自身の知識と自身の生活とを一致させるための行動、外部として在るものの認識を自身の内部のものとして、自身の内部から認識し実現するための行動であるが、その過程で彼を待ち受けているものが、一生をほとんど牢獄の中で過ごし旅とはまったく無縁な観のあるサ

ド、それでいて『ドン・キホーテ』を「あらゆる小説のなかで第一のもの」と評価するサド侯爵の言葉（以下、引用は“Idée sur les romans”, dans *Les crimes de l'amour*. coll.10/18に依拠している）の中に見出される。「小説が要求する最も本質的な認識は人間の心に関する認識である」という前提のもとに、南仏ラコスト城主は「(心に関する) 認識は (...) **不幸な事件**と**旅行**によってでなければ獲得され得ない。人間を知るためにはあらゆる国々の人々を見るべきであり、また、人々を正しく評価し得るためには彼等の**犠牲**になったことがなければならぬ」と断言するのだ。「旅先での不幸」ということになると、私の連想はおのずから、亡命先のアメリカで作曲の前には『ドン・キホーテ』に読み耽っていたという晩年の赤貧のベラ・バルトークの姿に移ってしまうのだが、要するにサドが言いたいのは、認識の深度の測定には論理知だけでなく [感覚・感情] 知の垂鉛も関わっている、ということであろう。**森の概念**を獲得するためには、周囲に立ちどまって観照するだけでは不可能であり、自然の論理の道筋を辿るだけでも不十分である、森の中に入り込み、内部の樹木の枝に頭を打ちつけ根に足をとられ、鬱蒼とした葉陰の暗闇を迷いつづけ、つまりは身を挺して木々の反応をじかに [感覚・感情] 的にも受けとめなければならぬ、ということなのだ。

言うまでもなく十九世紀初めのサドの言辞を十七世紀初めのドン・キホーテの行動の根拠に据えるのは本末転倒であり、ここでは、サドがおそらく『ドン・キホーテ』等から上記のような「人間の心」に関する認識の契機を抽象したことに興味をひかれるだけなのだが、それはともかくとして、事実、騎士ドン・キホーテは三度にわたる彼の遍歴の過程で、ガレー船の罪人や馬方、農民、商人、学生などから「身動きできぬほどうちのめされ」、「さんざんに打擲」され、あるいは「無理無体に袋叩きを加え」られ、投げつけられる「石つおて」の「あまりの激しさに、ついに地面にへたばってしまい」、「上着」どころか「靴下まで剥」ぎとられそうになり等々、サドが書きとめるようにまさしく平民たちの暴力の犠牲となり執拗なまでに肉体的な被害を蒙りつづけるのである。だが、被害者としての意識がドン・キホーテの内部に

生じたとしても（おそらく彼がそれを感じさせられたのは、彼の死の直前であろう）、彼が目指すのはサドと同じ方向ではなかった。①「あらゆる冒険を求めて世界じゅうを遍歴し、遍歴の騎士の慣いとして、かねがね読み覚えたあらゆることをみずから実際に行つて」②「ありとあらゆる非行を正し、かつは数々の危険と窮地に身を挺して、見事これらを克服し」③かくして「名声」を得て「己が名誉」を高めると同時に「国に（も）つくす」こと、というのが、小説の冒頭でドン・キホーテ自身によって提示された旅の目的である。だが、結局のところ、彼の遍歴の起源およびその生成は、①に尽きるものであって、②と③は、いわば冒険の過程で付随的に獲得される（見込みの）ものでしかない。②のように自ら求めて「危険と窮地に身を挺した」主従は、おおむね相手の暴力の犠牲になりつづけるだけであり、③の「己が名誉」も、自身が主人公である『才智あふるる郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ 前編』の現実的な（つまりは小説外的な、しかし、それが『後編』では同時に小説内的な契機ともされている）成功によって偶然にもたらされた（と『後編』で説明されている）ものにすぎない。

知識と生活を一致させるための遍歴の意義が最も象徴的に [表現・了解] されるのは出立の瞬間であり、それゆえにこそ、出立を絶えず繰り返すことが旅の目標・到達点ともなってくる。ドン・キホーテの冒険譚がさまざまな挿話の連続によって形成され成立しているのは、彼の旅が、原点とでも言うべき「かねがね読み覚えたあらゆることをみずから実際に行つて」ことにたえず立ち戻ってくるからである。つねに被害者となる不幸な事件の連続も、邪悪な「魔法使い・巨人」の犠牲に終始する冒険も、ラ・マンチャの男が有する〈旅への情熱〉・〈旅への狂気〉・〈旅の在り様〉を少しも変様させはしないという意味では、殆どゼロ体験なのである。森と木々とは、そこに入り込んだ地点ならびに時点、つまりは出立の空間的・時間的・点的に於いて、既にそれじたい森であり樹木であるのであって、その根本的な存在の様態を維持し守ることによって、背後に隠されているものを以前と同様にあるいは以前以上に、神秘の闇の中に包み込みつづけていく。森と樹木とは、単にそこに・

在ることじたいに於いて、無上の意義を発散させているのである。

※ ※

旅だけでなく、(旅という行動を通して認識される) ドン・キホーテの存在じたいも知識と生活との一致にまで昇華しているとすれば、彼の軌跡は「人間本性の二つの基本的、対照的特徴」(ツルゲーネフ：『ハムレットとドン・キホーテ』；河出書房新社版、藤沼 貴訳) のひとつを描き出すことになる、という主張も可能なのかもしれない。性格類型の提示という目的を持つこの1860年の講演で、『父と子』の作者は「懐疑的な頭脳をもった、青白い、苦悩し、分析をする、皮肉な、暗い面のある、まったく自分自身のために生きているエゴイストで、虚栄心がつよい、大衆を馬鹿にしている、十八歳の青年」ハムレットをつねに対極に置きながら、ドン・キホーテの特性あるいは徳性を以下のように形容している。

○かれはまったく、自分の外側で生きています、他人のために、自分の同胞のために、悪の絶滅のために、人間に敵対する力 — 魔法使い、巨人 — つまり、抑圧者たちに反抗するために、生きているのです。

○ドン・キホーテは、年をへた老木のように、地中ふかく根をおろしています、で、自分の信念を裏切ったり、一つのものから別のものへ移ったりすることができないのです。ドン・キホーテの道德体系の強固さは(ご注目いただきたいのですが、この狂った、放浪の騎士は、世界一道德的な人物です) — その考えや、ことば全体に、その姿全体に、なみはずれた力と重みを与えています。

○かれはたえず、こっけいで、みじめな立場におちいつていますが、それにもかかわらず (...) ドン・キホーテは熱狂の人です、理念に奉仕する人です。

○ドン・キホーテは何を表現しているのでしょうか？信仰、これが第一で

あります。何か永遠なもの、不動のもの、真理、一言でいえば、個人の外側にあり、容易に個人には与えられず、奉仕と犠牲を要求するけれども、たえない奉仕と、犠牲の力によって獲得される真理 — この真理に対する信仰なのです。ドン・キホーテはまったく、理想に対する献身の情につらぬかれています。かれは理想のために、ありとあらゆる苦難を受け、生命を犠牲にする覚悟でいます。

「理想に対する人間の二つの異なった態度」を図式的に明らかに描き出すためではあろうが、オブローモフ風な[懷疑・躊躇・逡巡]するインテリゲンツィアを北のハムレットに対応させ、他方「南国の太陽にてらしだされたような」物語の主人公である「狂った、放浪の騎士」を誉めたたえるツルゲーネフの筆致には、「人民の中へ」という標語そのままの行動への誘いではないのか、という邪推(伊藤 整や佐々木基一の「解説」でも指摘されてはいる)も浮かんで来て、何とはなしの違和感を抑え難いところがある。「ドン・キホーテ型は発見し、ハムレット型はしあげる」という対比表現も、優柔不断を断ち切る行動への誘いに基づくものとして読まれ得る。

だが、ツルゲーネフによるなら、ドン・キホーテの行動は、感情・情熱の力に圧されて自動的に押し出されてくるのではなく、行動の前提に確固とした(騎士道物語の)道徳的(ということは、論理的)原則があり、それが、燃えさかる情熱とともに現実の内部で理想実現をめざして現われ出てきて、しかも現実の世界での危険も苦難も厭わない、というものである。この「行動の前提としての道徳的原則」という点は、それなしではドン・キホーテあるいは『ドン・キホーテ』が単なる滑稽な存在・滑稽譚で終わってしまうだけに、重要である。「かれが自分の生命の価値をみとめるのは、それが理想実現の手段として、地上に真理と正義を確立する手段として、役立つ限りにおいてなのです」という指摘も、ドン・キホーテの企てが単純な狂気の単純な発現によるものではないことを印象づけている。ハムレットに於ける「幽霊」と同様に、ドン・キホーテにも「魔法使い・巨人」というく非・合理

性〉の根拠が出現するのだが、『ドン・キホーテ』や『ハムレット』が発表された当時は、霊や魔法も、その存在したいが疑われることはない時代であっただろうから、それらと対決するドン・キホーテの思考の在り様は、狂気という枠内ではあれ、従者の世間知以上の、そしていささか時代離れはしているものの、想像以上に強韌な「道徳性・論理性」に貫かれている必要があったのかもしれない。

だが、おそらくは、ロシアの読者大衆には単なる「こっけいな」存在としか見られなかった、というドン・キホーテの行動の意義を説き明かすために、ツルゲーネフは、ハムレット（の狂気の場合は現実的な道徳的原則であった）と同様な、「道徳的根拠に基づく狂気」のドン・キホーテ、という面を強調しすぎており、そのため、自身の意図を超えてハムレット以上に深刻な北の世界、深く暗いゲルマンの森の憂愁を、金盃の兜をかぶり老いぼれ馬にまたがるドン・キホーテの姿にも与えてしまったように私には感じられる。加えて、単なる訳語の問題かもしれないが、「人間に敵対する力 — 魔法使い、巨人 —」を「つまり、抑圧者たち」と書き換える語彙の感覚には、やむをえないこととはいえ、やはりツルゲーネフ自身が生きていた時代の痕跡が刻され過ぎていると思われるし、「ドン・キホーテが表現しているのは信仰である」というような指摘も、私などには少しく理解が届き難い。とはいえ、言表されている「個人の外側にあり、容易に個人には与えられず、奉仕と犠牲を要求するけれども、たえまない奉仕と犠牲の力によって獲得される真理」というような言葉の繋がり、私の注意を喚起するに十分である。この「個人の外側に在るもの」を私はほとんどオルテガの言う「慣習」（色摩力夫：『オルテガ』）の概念を補完するものとして捉えたい気がする。「慣習」の〔合理的／非合理的（デュルケーム）〕在り方との関連等も含めて、もとよりここでは詳述には到り得ないが、騎士道・物語への〔回帰・再現・再生〕は、既に喪失した過去の習慣への〔回帰・再現・再生〕の浪漫的な様相・典型のようにも思われるのである。

※

私は人間である、ゆえに私は考える。

ミゲル・デ・ウナムーノ

ドン・キホーテを外部から羨望していた感のあるツルゲーネフと比較すれば、「生身の肉体を有する人間」をその哲学の基礎に保持しつつけようとするウナムーノ（『生の悲劇的感情』。ただし、以下の引用に際して参照したのは1971年刊のMarcel Faure-Beaulieuによる仏訳版：*Le Sentiment tragique de la Vie*. coll. Idées）の場合には、やはり、自身の文化の内部からこれを対象化しようとする意図が明白であり、したがって、情熱（感情）が果たす役割も、民族的・文化的な同一性を構成する要素として、いっそう重視されるに到っている。だが、信仰もしくは「飢え・エロース」という〈非・合理性〉へと傾斜するウナムーノに於いても、[論理・感覚・感情]に関わる認識論上の二元論もしくは二者択一論を素朴に語るだけで済む時代では、もはや、なかった。「サラマンカのドン・キホーテ」とも呼ばれたこの「実存主義の先駆者」（Alain Guy：*Unamuno*；Seghers, 1969）は、ドン・キホーテの[狂気・情熱]をスペインに於ける文化・精神史上の一事件として取り上げる。[ルネッサンス・宗教改革・フランス革命]（という「理性」支配）に対する反抗の行動の具現者としてのドン・キホーテ、あるいは「英仏を中心とする」ヨーロッパ文化の流れに対峙する「辺境スペイン」の象徴的像としてのドン・キホーテ、というように。

[理性・感情]と文化とのこのような交錯は、周知のように、ヴァイマル期およびその前後のドイツに於いて顕著であったが、1912年刊行の『生の悲劇的感情』の「結論」部分は、そこに付された「現代ヨーロッパの悲喜劇の中でのドン・キホーテ」という副題とともに、ウナムーノの思索が、非・合理的な生の力を求める当時の西欧の文化・歴史・社会的思潮の動向に、宗教的な方向を目指しつつ、積極的に参画していたことを暗示している。「思考を感情の上に、つまりは理性を信仰の上に置く者は喜劇的に死に、信仰を理性の上に置く者は悲劇的に死ぬ」とひとまず提示されるウナムーノの言辞

は、時代背景を加味して「喜劇的に死ぬのは嘲笑する者 (=英仏)、悲劇的に死ぬのは嘲笑される者 (ドン・キホーテ=スペイン)」というようにウナムーノ自身によって換言される (カッコ内は引用者) のであり、これこそがスペインに関わるウナムーノの知識の [感覚・方向・意義] の集約的な表現であると解釈され得る。いわばゲーテに回帰したドイツのように、スペインの文化・精神史的な「遅れ」を自覚する意識は、微妙に屈折した感情を「進んだ英仏 (ヨーロッパ)」に抱きつつ、ドン・キホーテへと回帰するのであり、しかも時代を遡るその動きは、民族としての誇りの根拠を讚美・称揚する意図に基づくという華やかな積極性ではむしろなく、敢えて言えば、スペイン民族を反映する像、ドン・キホーテ的存在としてのスペインを自ら再確認するための像として、どうしようもなくひたすらそこに在る、そのような存在としてのドン・キホーテに戻っているように見てとれるのである。

○我々スペイン民族の心の中で、哲学は、ひとつの内的な悲劇の表現として捉えられているように私には思われる。つまり、我々にとって哲学は、科学的な理性が我々に示してくれる世界と、宗教への信仰によって、そうあってほしいと我々が望み得る世界との間の戦いによって生まれてくる悲劇、言うならばドン・キホーテの心の内部の悲劇に類似した悲劇、の表現なのである。

○私は自分に中世の心を感じ、私の祖国の心は中世的であると考えている。我が祖国は、その後、ルネッサンス、宗教改革、フランス革命の経験を余儀なくされ、それらから何ごとかを学んではきた、ただし霧に包まれた時代と言われる中世の精神的な遺産を保持したまま、民族の心を損なうことなしに...

したがって、ウナムーノの方向・関心で解けば、「魔法使い・巨人」という名の不屈きな理不尽な風車に向かって決行するドン・キホーテの無謀な戦いは、①時代の動向に対して遅れたものが企てる戦い、②合理性を求める「近

代的」知識に対して信仰に根を置いた宗教的知識が企てる戦い、ということになるようである。今日の使命は「砂漠のなかで叫び続けること」である、とするウナムーノのドン・キホーテ像は、二十世紀初頭の時代思潮のなかで、スペインのひとつの側面としての宗教的求道者の姿を我々に見せてくれた、と言えるのかもしれない。

※

「カントの『人間論』の中にスペインについての非常に深く確かな考察がなされているが、それがあまりにも適確なので、一読してぎくりとするほどである。カントがそこで言っているのは、トルコ人というものは旅をするとき、行く先々の国を、その国特有の悪習によって評価するならわしだという。そして彼は、このやり方を用いて、次のような表をつくっている。一、モードの国（フランス）二、無愛想の国（イギリス）三、先祖の国（スペイン）四、からいばりの国（イタリア）五、肩書の国（ドイツ）六、君侯の国（ポーランド）／先祖の国！ということつまり、われわれ現代スペイン人の自由な天地ではないということだ。もうすでにあの世に行ったものたちが、いまだにわれわれを支配し、われわれを圧迫する死の寡頭政治を行っているということである。」（オルテガ：『ドン・キホーテに関する思索』；アンセルモ・マタイス、佐々木 孝訳）

1914年に刊行されたホセ・オルテガ・イ・ガセトの『ドン・キホーテに関する思索』は、自身の言によれば「国を愛する切々たる胸の思い」に貫かれている、そうである。「そうである」というふうに伝聞の形を採るのは、そこに剥き出しの「民族主義・国民主義」を見出すのが困難だからであり、詩的なしかし抑制のきいた論理的主張は、スペインに限定されるべき愛国精神のようには、閉ざされた排外的な愛国主義には響いてこないからである。もちろん、スペインの将来に関心を寄せるという点では、オルテガにもウナムー

ノとほぼ共通する時代認識があったようであるが、たとえば [生/理性] に関して、対立するその一項に優位を与える当時の一般的な思潮（「生」に傾くウナムーノや「理性」重視の新カント派等々）と比べると、中庸あるいは地中海的明晰さを尊ぶオルテガの場合には（「理性と生の対立自体も、もはや疑わしいものである」）、やはり、実在認識の方法のみならず文化・精神的観点に於いても、現実性によりいっそう近づくための統合への動き、統合としての在り様へと関心が向かっていたようである。

ドン・キホーテに関わるオルテガの「予備的考察」は（既に、十分予測され得るように...）森を対象とする「認識の透視図法^{ペルスペクティブ}」から始まっているが、本稿の関心と重なる部分の記述を、ただし非・詩的に要約すれば、大略、以下のようになる（主要術語および訳文は上記の『ドン・キホーテに関する思索』邦訳から援用する。なお、オルテガの「透視図法」は、認識の可能性・現実性の次元では、表層と深層の単なる「二元論」とみなされる側面、つまり、フッサールの現象学に反するものとして解釈される側面を有しているが、しかし実際にはさまざまな交錯の認められるその点の検証は別の機会にゆずることにして、ここでは、スペインの文化性に関わるオルテガの [表現・了解] のみを対象化することにする）。

○我々が見る対象は個々の樹木でしかない、森は、これら個々の樹木を見つめる視点のその延長上にしか存在しない。つまり、森は、その内部にさまざまな実在から成る表層の世界（可能性の世界）を有し、同時にその背後（深層）に他のさまざまな実在があることを教えてくれる「場所」なのである。「深さは表層に現われる諸性質の中に自己を顕現する」。

○しかし、我々はこの「他の実在」をじかに見る訳ではない。森は、個物を包み込む、いわば概念のようなものである。ある環境のもとに在る我々が、自身の固有の視点からこの「概念=森」に達するためには、認識上の可能性は本来的に在るのだから（「深さの広がりとは、それが空間的なものであれ時間的なものであれ、あるいは視角的なものであれ聴覚的なものであれ、常に表層に現れるものである。」）、必要なのは、我々の側からそこに接近してい

くための不断の努力である。

○この「努力・見ること・観察すること・アイデアとの関与に於いて把握すること・ある透視の下で眺めること」、要するに**明澄化**することがオルテガの言う「透視図法としての認識」行動である。だが、この認識行動の結果として、しかし我々は、以前よりは**文化的には安定した**、けれども依然として新たな意義の探索を求められる新たな世界のもとに在る自身、を見出すだけである。「森とはわれわれの可能な行為の総和であり、それが実現する時には、その真正なる価値をうしなってしまうものなのだ。」

オルテガ自身は明言してはいない（が、示唆しているようには推測される）が、上のような考えの延長上には、ドン・キホーテと〈スペイン〉との関わりについて、以下のような比較・透視が成立するかと思われる。即ち、樹木の背後に控えている空間的な**深さ**としての森は、時間的な**過去**でもあり、また、個々の存在の背後に在る空間的な**環境**でもある。この過去と環境との関わりに文化に係わる「^{ペルスペクティブ}遠近法」を援用すれば、樹木に当たるのがドン・キホーテ（及びその従者）であり、森に当るのはスペイン文化、ということになる。ドン・キホーテが眼前の樹木であるとするれば、彼の動作・行動をとおして、我々は**概念的な知識**としての、森である〈スペイン〉を透視し得るのである…

他方、作品に関して、オルテガは「『ドン・キホーテ』はひとつの曖昧さ」であると判定しているが、スペインならびにドン・キホーテに関する彼の他の規定を併せ見ると、『ドン・キホーテ』という作品の中で対象化されるさまざまな曖昧さは、スペインとドン・キホーテというふたつの〔感覚・方向・意義〕を共有していることが分かる。つまり、一方の極には「スペインを**矛盾**として感じとることほど今日重要な課題はない」とされる、そのような多義的な解釈が可能な〈スペイン〉があり、いわば深層の曖昧態としての（森としての）スペインが、作品としての（樹木としての）曖昧な『ドン・キホーテ』を表層としているのに対して、他の極には、深層の作品としての

(森としての)『ドン・キホーテ』の内部に表現された「スペイン文化の曖昧さの監視人」としての(樹木としての)ドン・キホーテが表層に存在している、のである。このようなオルテガの「認識の透視図法」を私の語彙連関でまとめれば、[了解の根拠としての表現・表現の根拠としての了解]が、ドン・キホーテと『ドン・キホーテ』、『ドン・キホーテ』とスペインとの間で相互に成立し生成されている、ということになる。『才智あふるる郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ 前編』が出版された年(1605年)だけで七版を重ねたという成功それじたいも、〈スペイン〉が作品としての『ドン・キホーテ』に対する[表現・了解]の根拠となっている、という現実的な在り様の反映もしくは実証であると言える。かくしてオルテガにとってのドン・キホーテとは、スペイン文化の在り様を批判的に検証するための契機、ということになりそうである。〈スペイン〉についての考察を深めるための、最大の、そしておそらくは唯一の契機(きっかけ)というのが、オルテガがドン・キホーテあるいは『ドン・キホーテ』に与える役割なのである。そして、さらに1914年という『ドン・キホーテに関する思索』が刊行された時代背景を考慮に入れるならば、この契機は、オルテガの考えていた「民族主義・国民主義」の開花をもたらすためのものであったと推測される。「自分たちの国土で生産されたものならなんでもスペイン的なものとして受け入れるような愛国心」や「邪悪な愛国主義」に没入するのではなく、「過去の迷信」から解き放たれ、見せかけの「スペイン的なもの」を捨て去り、「因襲に抗して、因襲をはるか越えて」進むべきである、とするのがオルテガの主張する新たな「民族主義・国民主義」である。「私は因襲に従うことはできない。(…)因襲の瓦礫の中から、民族の第一の実態、スペイン的なものの規準、混沌に対する時のあの単純なスペイン的戦慄を救い出すことが、我々の急務なのだ」。

1910年代の〈知識人〉に於ける日本的愛国心との「乖離」を、ここで安直に言いたてるべきではないかもしれない。だが、『ドン・キホーテ』という作品によって概念化され得た〈スペイン〉に対応する〈日本〉、あるいは〈日

本〉という森を構成する典型的な樹木の一つとして挙げ得るような『ドン・キホーテ』に対応する作品・主人公名、それらが現実に日本に存在したのかしなかったのか、という程度の吟味は、我が貧困なる理解力を嘆く前に、まづなされてよい作業であったかもしれない。しばし沈思してみて、しかし私には、該当し得る名称が容易には、森の中から突出する樹木の如くには、輪郭を明らかにして浮かび上がってこないようである…

だが、はたして、「かつてそうあることができたはずの、虹色の宝石の様なスペインの姿」が、「今まであった（失敗例としての、見せかけの）スペインを焼きつくす」とき、その「灰の中」にいわば自動的に見出し得るのだろうか。因襲を嫌い迷信を斥ける意図を鮮明にするオルテガであるが、しかし、まさに彼の透視図法そのものによって、過去の文化との連続性あるいは同一光源に基づく文化の広がり¹は保持され続けているのである。（「森と木々」のような思考枠を崩す試みがなされるのは、ほぼ七十年後のことになる）。過去との継続を断ち切った新たなスペイン（なるものが存在可能だとして）が生じてくる、その可能性の実現のためには、森と木々との比較に容易に対応する（森としての）民族と（木々としての）個人との関わりに関して、新たな民族のための新たな個人²の概念内容が、排他的な民族観によるのではない形で提示され把握されなければならないのではないか。あるいはむしろ、生得的な文化の広がり、文化性を想定する前に、後天的に習得する教養の役割をより重視することも要請されているのではないのか。

オルテガの柔軟な思索が、単純に即座に決定論的立場に移ったとは思えない。「個人主義の行き過ぎによる〈ヨーロッパ〉の破綻」などという当時のひとつの潮流に安易に迎合したとも思えない。だが結局は「個人は民族を通してでなければ、世界の中で方位を決定することはできない。なぜなら、彼は、流れ行く雲の中の一滴水のように、民族の中にとけこんでいるからである」という彼の〔個人・民族〕観、そして「環境を自身の構成契機とする個人」という、いずれにしても統合に於いて在ることを「私」の〔根拠・理想〕とする彼の基本的な立場からすれば、新たなスペイン生成の動きに関し

ての「新たな個人」などという観念的な一側面のみ視点への移行は、容易にはなされ得なかった、ということであろう。それにしても、彼の「民族主義・国民主義」が1936年の試練を経た後の発言であったなら（どう変化したであろうか、あるいは変化しなかったであろうか）、という想いは残る。それと、『ドン・キホーテに関する考察』では、「見せかけのスペイン」と真のスペインとの関わりは、「スペインの可能性に迫った」セルヴァンテスの小説の創作の過程の内部に収束することになってしまい、[神話・叙事詩・物語・小説]という文学のいわば系統樹の叙述が展開されることによって終息してしまっており、それはそれで、もちろん、文学についてのオルテガの関心の方向を示してはいるのであるが、それでも、それだけでは掬いきれない部分があるのではないかという想いも、やはり依然として、残ることは残る。

※ ※

感情・感覚の反発は思考の力によってでなければ抑制あるいは是正され得ない。そして、これと矛盾するようなのだが、思考の反発は感情・感覚の反発を伴ってしまい、これを思考の力だけで抑制あるいは是正することは、不可能ではないとしても、日常的にはきわめて難しい。とすれば、認め、勧め得ることは、「思考の力の行使は、感情的反発へと向かう前に、十二分の吟味が必要である」という庶民的な格率である。耐えつづけるサンチョ・パンサの智慧の力の方が、ことによると、最も柔軟な思考に富んでいる、ということなのかもしれない。そして… スペインに関わる感情について言えば、その[感覚・方向・意義]は、新たな知識によってしか、新たな了解に到り得ないと断定できそうである。『ドン・キホーテ』の理解は、感情・感覚の世界だけではなく思考の力によって開けるものであり、その根拠にはさまざまな角度からのスペイン文化への、了解をめざし求める視線が秘められているのでなければならない。「文化がなす働きと言うものは、すべて生の解釈—明晰化、説明あるいは解釈—である（オルテガ）」のだとするならば…

※ ※ ※

外は熱が垂直に落ちてくるかのような暑さ。プラド美術館でゴヤの怪奇画に仰天し、いわゆる「スペイン絵画の灰色」に納得し、だが、この暑熱ではひととおり見終わっても熱光の射す屋外に出る気にはとてなれず、食堂に隣接する一角で休憩している間に、私と同年代と見られるスペイン研究者（と呼ぶべきか、はからずもこのスペインという国の文化・生活を相手にしてしまった日本人男性、と言うべきか）からいろいろな話をうかがう機会があった。以下は、このときの彼の教示を私の責任でまとめたものであるが、そこでの知識も含めて、上のように改めて書き記してきたことどもの素材となったマドリッドに始まりバルセローナに終わる約一カ月の短いスペインの夏の旅の体験が、私に、さまざまな知識の混淆としての〈スペイン〉への[感覚・方向・意義]を確定する、そのための萌芽をもたらしてくれた、ようなのである。

○スペインは情熱ですよ、情熱さえ込められていれば、許されるとは言えませんが、ともかく、そのものに賭けた情熱というか気力というか、そういう力がなければだめですね（私は、パリの下宿でスペイン人の^{コンシエルジュ}管理人のおばさんから、しばしば、“ヴィヴァンテ、ヴィヴァンテ！”とハッパをかけられたことを思い出していた）。説得も、弁解も自分の熱意が込められていて、それが認められれば、ようやくそこから全てが始まるんです。ある意味では、論より情熱、ですね。だから、時によっては、とてもアナーキーになる。

○ドン・キホーテは、一人歩きしたスペイン、でしょうね。あんなに有名でありながら、あんなに読まれていない本も珍しい。いや、あんなに読まれていないのに、あんなに有名な本も珍しい、と言うべきかな。サンチョ・パンサ、特に『後編』に描かれたその人間像は、「ことわざ癖」はともかく、小智にたけた、村の物知り男、欲深だが、主君には忠実で、かつてのスペイン

そのものなんでしょうね。

○語呂あわせで言えば、〈喧騒・乾燥・闘争〉ですかね、スペインは。日本に帰って私が感じるのは、喧騒は、同じかもしれないが、人間の声による喧騒ではないですね、スピーカーとか、機械に媒介されていて、人間的ではない。人間関係も湿っていて、陰湿とまでは言わないでおきますが、ジメジメ、ジメジメ…それから、闘争はどこにでもあるでしょうが、湿った風土と同じで、裏に回っての、暗いところでの戦いですね。誰の目にも戦っていることが分かるような、輪郭のくっきりとした明晰な戦いは、昔はともかく、今の日本ではあまり見られない。

○日本的な良さというのは、以前ならどの国でも持っていた美点ではないでしょうか。スペインでも田舎へ行くと「日本的な良さ」と同じものに出会う事ができます。だから、特に日本という地域に限られたものではない、という意味では、空間概念というよりは時間概念なんだと思いますね、「日本的」という言葉は…。

○女性崇拜は、ヨーロッパだけではなかったでしょうが、スペインから見ていると、殊更それを前面に出すのは、何かアラブ世界への挑戦のように感じられますね。四百年もイスラムの支配下にあったところですし、すぐそこまでアフリカも迫っているし。ドン・キホーテの「ドゥルシネア姫」讚美だって、文化的な意味でのアラブへの挑戦、それを通じてヨーロッパとの繋がりを確かめたい、という側面もあるかもしれませんね。

○オルテガが、スペインの文化の混淆性を言っています。彼のその文を読むと、古代「日本」が古代「中国・朝鮮」でもあることが、むしろ誇らしげに感じられてくるから、不思議ですね。思想の言葉というものは、そういうものかもしれない。精神がゆるやかに、納得しつつ外へ開かれ広がっていく、その豊さが感じとれるような言葉…

○昔の事です、作品紹介で、「オルテガとガセット」という風に、著者を二人にしてしまった日本の学者がいたんですよ。いや、やっぱり専門が違っていると、恥ずかしい間違いをしでかすもんです。でも、まあ、それでもいいのか

もしも、いや、良くはないだろうけれど、誰でも、ドン・キホーテになつてみたいことはあるのだから…

○ところで、フロベールが、彼の書簡その他で、ドン・キホーテについて、いろいろ語っているのをご存じですか？

※ ※ ※

地中海人にとつてもっとも重要なのは事物の本質ではなく、その存在、現存在なのだ。つまりわれわれは、ものよりも、それが与える生きた感覚を愛好するのである。

ホセ・オルテガ・イ・ガセト

そして、細川さんは、私の近辺では最もドン・キホーテ的な存在と言える。ただし、戦中、「一兵タニ適セス」と酷評されたというこの関西弁のドン・キホーテ氏は、武勲の発揚とは無縁な生活を送ってきたようだ。「戦わぬドン・キホーテ」とは形容矛盾かもしれないのだが、スペインあるいは南米の地も戦士で充満している訳ではあるまい。戦いの最中ですら、ギターやカスタネットの音は夜空に響きわたったであろう。砲煙が途切れさえすれば、タンゴの舞いは、抑制された表情で生と死の暗黒の境を見据えつつ、時のうつろいも忘れて狂おしくも旋回しつづけたであろう。細川さんの辿ってきた路は、必然的に、こちらの方であらざるを得なかった。ラ・クンパルシータあるいは（一転して）燃えて身を灼く大文字…の情熱の方向である。夢の夢こそあはれなれ…と謠う道行の哀感の世界である。

細川さんのドン・キホーテ性は、おのずとあふれ出る情熱の奔放さ、その非・現実性に見出される。だが、情熱の根柢に透視され得るその思想性を看取した人は、しかし私の見るところ、それほど多くはない。なるほど、ドン・キホーテ程度（？）の思想性など誰の内側にもある、と言えなくもない。外面だけでは判断のしようもない、のも確かだ。だが、要するに「何れにせよ」ということになるのだが、定義に関わる臆病な懸念を遙かに超え

て、社会の拘束、「右にならえ」式の規制、「大物にはうわべだけの敬意を、小物には冷やかな軽蔑を」式の人の遇し方、それら全ての、官僚制と言っても階層制と言ってもよいのだが、管理の体制およびそれを支える考え方・感じ方から、細川さんの発想は全く自由である。

もっとも、「～から自由である」とは「～が出来ない」という事態と同義である。「～から逃げている」という在り様ともほぼ完全に重なり合う。だからといって、その評価を下げてしまうと、細川さんの思想性は見えてこない。おそらく「～は自由である」という命題もしくは述語規定じたいが、今日に於いては、「全的に自由ではあり得ない」ことを意味してしまっているのだ。にもかかわらず、旧態依然たる自由への幻想は存続しているから、「逃げる」ことや「出来ない」ことじたいが持つ積極的な意義に対して自由な認識が届かなくなってしまっている。上下関係の固定に迎合する体質・環境の中では、「逃げない」人も「出来る」人も、結局は「自己（他者）への・自己（他者）からの評価」に基づく体制に捕えられ、それを支える存在になってしまうのだ。自由であらんとする存在は、必ずしも自由な在り方で在ることを保証されていない。硬直する組織は、硬直する個性以上にグレッツである…

細川さんの情熱は、そこに、存在する。私は、個人の力の発揮を言っているのだ。あるいは、個性の充溢そのものを言っているのだ。敗北もしくは犠牲を予定づけられたドン・キホーテは、まだ何代も、その後継者を必要とするかもしれない。私は、その情熱が風化しない土壌を夢想しているのだ。

(1994年8月24日)